

優秀賞

【生活科】

困難に立ち向い、 乗り越えようとする力の育成

広島県竹原市立忠海学園

あり まつ こう じ
有松 浩司

1 | 主題設定の理由

子どもたちに失敗をさせたくない、できる限り成功体験を積ませて明るく楽しい学校生活を送らせてあげたい。教師という仕事を続けている以上、このように考えるのはごく当然のことである。事実、私自身もこれまで様々な学習活動において、子どもたちにはできる限りの手厚い支援を行ってきた。学習に必要なものがあれば、あらゆる場合を想定して準備を行う。子どもたちが困難に直面しそうな場面が予測されれば、可能な限りそれらを回避するように努める。異学年の子どもの前で学習の成果を発表する機会があれば、事前に問題点を指摘し、必ず成功するように導く。こうした教師の手厚い支援を受けながら成功体験を積んだ子どもたちが、自分に自信をもち、いきいきと活動する様子をこれまで何度も目の当たりにしてきた。

しかし、今一度この成功体験が、本当の意味で「成功」であったのかを考えてみる必要がある。子どもたちが得た成功は、あくまでも教師の支援があったからこそ成し得たものであり、自分自身の力でつかんだものではない。本来「成功」とは、自身が様々な困難に直面し、失敗と再挑戦を繰り返す中で得るものでなければならない。実際に私たち大人も、これまでの人生を振り返ったとき、困難や失敗、挫折を踏まえながら最終的に得た成功のほうが、自身のその後の人生に大き

な影響を与えたということがあるはずである。

現在は、非常に変化の激しい時代である。人口減少、高齢化による労働力不足、未だ収束の見えない新型コロナウイルス感染症など、先行き不透明な現代社会において、子どもたちは今後多くの困難に直面することが予想される。そのような未来を生きる子どもたちに、学校教育において身に付けさせるべき力は何か。その一つが本研究のテーマにもなっている「困難に立ち向い、乗り越えようとする力」だと考える。困難に立ち向い、乗り越えようとする力は「レジリエンス」とも言われ、新時代を生きる子どもたちに欠かせない資質・能力とされている。たとえ目の当たりにしたことの無い困難に出合ったとしても、様々な情報を収集し、対策を考え、勇気を出して実行する。時には他者の協力を得ながら、なんとかその困難を乗り越えようとする。学校教育において、このような経験をもった子どもたちは、きっと社会に出てからも、様々な困難を自身の力で乗り越えようとするはずである。

本研究においては、この困難に立ち向い、乗り越えようとする力を育成すべく、学習入門期とも言える低学年を対象に生活科の授業を実践する。低学年というと、より教師が手厚く支援を行うのが一般的であるが、あえてこの学習入門期に困難に立ち向い、乗り越える経験を積ませることが、今後の学校生活を充実させる上で重要であると考えた。本研究を通して、困難に立ち向い、

乗り越えようとする力を育成するための単元づくりの工夫点や指導のポイント等について考察していく。

2 | 研究の構想

(1) 困難に立ち向い、乗り越えようとする力がなぜ必要か？

本研究テーマでもある「困難に立ち向い、乗り越えようとする力」は、「レジリエンス」とも言われている。(ただし、レジリエンスはより広い意味をもつ) レジリエンスとは、復元力、回復力、弾力を意味する言葉であり、近年学校教育において、非常に着目されている資質・能力の一つである。この点について小林(2021)は、災害や感染症など大人が経験したことがない危機が発生する時代において、これから生きていく子どもたちのためにも、学校教育活動の中にレジリエンスを織り込むことが重要だと述べている。

これまでの学校教育では、子どもたちにできるだけ負荷をかけないように、教師が手厚い支援を行うのが当たり前であった。しかし、今後変化の激しい社会を生きていく子どもたちには、困難に出合ったときも、自らの力で心を回復させたり、乗り越えようと努めたりする力が一層求められる。そのためにも、小林(2021)が述べているように、学校教育活動のカリキュラムの中に、子どもが困難に直面する場면을意図的に設けることが大切である。

(2) 生活科においてどのように単元を構成すべきか？

では、困難に立ち向い、乗り越えようとする力を育成するためには、どのように単元を構成していけばよいのであろうか。

須本(2018)は、生活科授業の基本展開構造として、体験と話し合い活動を往還することの大切さを述べている。体験を体験のみで終わらせるのではなく、その体験で生まれた気付きや問いをもとに話し合いを仕組み、どうすればよりよ

い活動になるかを子どもたち自身に考えさせ、再度実行させることが重要だというのである。

また鹿毛(2019)は、「質の高い学び」を生み出すためには、次のような単元構成が重要だと述べている。それは、子どもが自らの興味をもとに目標をもち、活動計画を立てて実際にやってみる。そして、分かったことや反省点を振り返り、新たな課題を発見して目標を再設定するとともに活動を計画し、実行し、振り返る。このようなスパイラルな問題解決プロセスが重要だというのである。

須本(2018)と鹿毛(2019)の考えに共通しているのは、何か活動をした後は、必ず話し合い活動による振り返りを行わせ、その反省点をもとに、新たな活動を計画し、実行させるという点にある。そこで本研究においては、活動を一度きりで終わらせるのではなく、その活動を踏まえて生まれた新たな困難や反省点について話し合い活動を行わせ、自分たちで取り組みを工夫・改善しながら新しい活動を実行させるという流れを基本とする。

(3) 教師の役割は何か？

これまで当たり前のように行ってきた教師による手厚い支援を行わず、あえて子どもたちに困難を経験させる。そしてどのように改善すればよいかを子どもたち自身に考えさせ、実行させる。こうなると、教師は何もしなくてもよいのではと思われるかもしれないが、決してそうではない。子どもたちが自らの意志で学びを進めていくことができるように、様々な「しかけ」を作っておくことが教師には求められる。

この点について鹿毛(2019)は、「しかけ」の働きとして、「①学びを刺激する」「②学びをガイドする」「③学びを可視化する」の三つを挙げている。①の学びを刺激するとは、教師による活動への動機付けである。困難に立ち向い、乗り越えようとする力を高めようと思ったら、当然子どもたち自身に、なんとかして目の前の困難を乗り越えたいと思わせることが必要不可欠である。

②の学びをガイドするとは、子どもたちが困難に出合った際、解決の道筋を示すことで活動を方向付けることを示している。③の学びを可視化するとは、解決の方向性を目に見える形にすることである。その一つとして、子どもたちがもち寄った意見を板書によって整理することで、よりよい解決に向かわせることが挙げられる。このほかにも、学びの足跡を振り返りという形で記述させておくことも、学びを可視化する上で重要である。

(4)本単元「大きく育て わたしの野さい」における単元構想

以上の(1)～(3)を踏まえ、第2学年の生活科「大きく育て わたしの野さい」という単元を構想した。単元の構想図を以下に示す。

3 授業実践

(1)授業の概要

- 学年・教科：第2学年生活科
- 単元名：「大きく育て わたしの野さい」
- 実施時期：令和3年5月～7月

○単元の目標

- ・植物を育てる活動を通して、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって働きかけ、成長の過程に目を向けながら、それらが生命をもっていることに気付くとともに、自分が育てている植物に親しみをもち、大切にすることができる。
- ・様々な困難に対して、友達との話し合いを重ねながら改善策を考え、進んで乗り越えようとするすることができる。

(2)指導の実際(全27時間)

①自分たちで野菜を育てたいという意欲をもつ(1時間)

単元の導入では、子どもたちに育ててみたい野菜を考えさせることから始めた。通常この活動では、教師が育てる野菜を指定することも多いが、あえて自分で育ててみたい野菜を選ばせ、一人一種類ずつ育てさせることで、野菜を育てることへの意欲を高めるとともに、自分の育てる野菜に責任をもたせることにした。また、ウェビングマップを用いて、そのためにどのような取り組みが必要であるかを考えさせた。野菜の育て方について

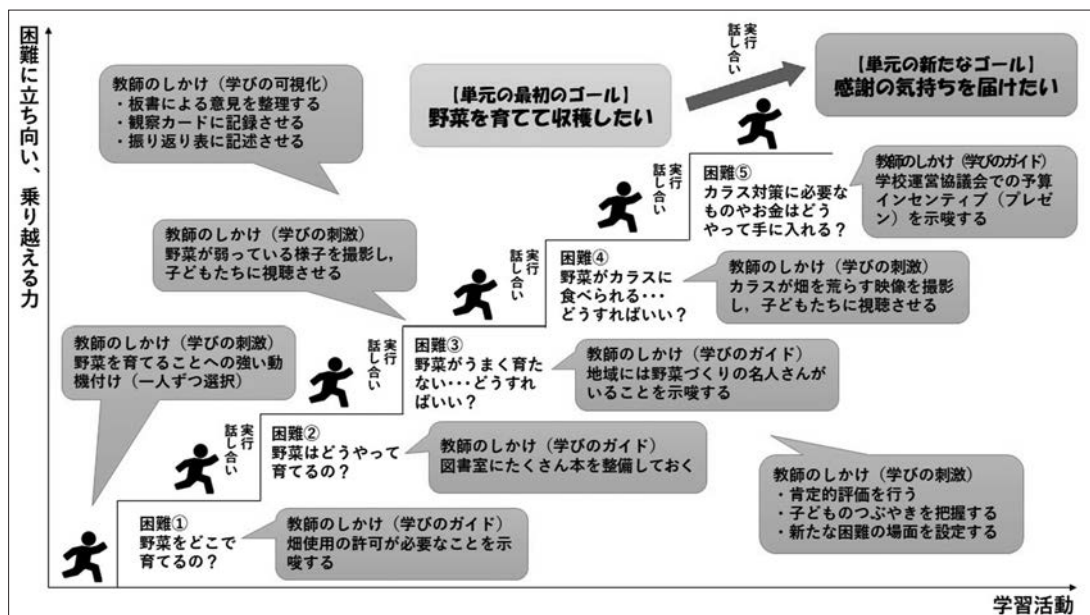


図1 第2学年生活科「大きく育て わたしの野さい」における単元構想図

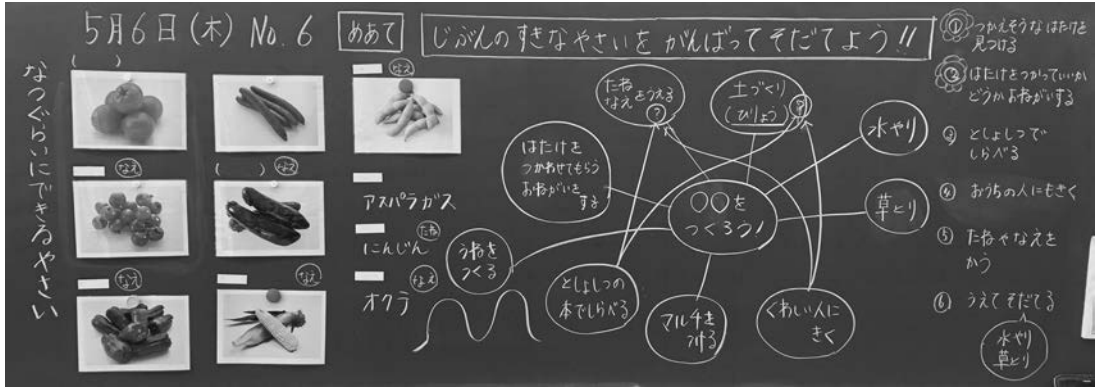


写真1 単元の導入時の板書

図書室で調べる、野菜の名人さんに聞く、苗を植えて毎日水やりをする等、子どもたちから様々な意見が出て、大まかな活動計画を立てた。(写真1は、第1時の板書)

②野菜を育てるための場所(畑)を探し、交渉する(1時間)

通常であれば、野菜を育てるための畑は学年ごとに割り振られ、教師側が一方的に指定するものであるが、まずここで一つ目の困難に出合わせることにした。子どもたちには、「野菜を育てるって張り切っているけど、どこで育てるの?」と投げかけ、校内で野菜を育てられそうな場所を探させることから始めた。校庭を歩き回り、広い畑を見つけた子どもたちが「先生、ここでのいいのではないですか?」と言ってきたので、「学校の場所は勝手には使えないよ。どうしても使いたいなら、教頭先生にお願いをしに行かないといけないよ」と伝えた。すると子どもたちは、自分たちでどのようにお願いするかを話し合い、緊張した面もちで教頭先生を訪ね、「一生懸命野菜を育てるので、畑を使わせてください」とお願いをしていた。教頭先生から許可が出たときは、非常に嬉しそうな表情を浮かべていた。



写真2 畑を探す児童の様子



写真3 畑の使用をお願いする児童の様子

③野菜の育て方を図書室で調べる(2時間)

子どもたちにとっての二つ目の困難は、野菜をどのように育てるかということである。これも教師が一方的に教え込むことは避け、自分たちで図書室の本を使って調べさせることにした。図書室には野菜の育て方に関する本が多数整備されていたので、それらの本をもとに、野菜の育て方を学習していった(読めない文字や意味が難解な内容については、教師からも分かりやすく解説する等の支援を行った)。



写真4 図書室の本で野菜の作り方を調べる児童の様子



写真7 看板を作る児童の様子

④畑を耕し、野菜の苗を植える（3時間）

野菜の育て方を一通り学習した子どもたちは、いよいよ畑へ行って、野菜の苗を植えることにした。畑を耕したりシートを張ったりする作業もすべて自分たちで行い、一人ずつ野菜の苗を植えた。同時に子どもたちからの発案で、看板を作ることになった。こうして野菜づくりが本格的に始まった。この段階で子どもたちは自分の苗にかなりの愛着をもっており、野菜の苗に名前を付けたら「早く大きく育てね」と声をかけたりする姿が多く見られるようになった。



写真5 畑を耕す児童の様子



写真6 苗を植える児童の様子

⑤継続的に水やりや観察を行う（常時活動+4時間）

野菜の苗を無事に植えた子どもたちは、特に指示されなくても、毎朝の水やりを欠かさず行っていた。それだけ野菜に関する愛着が高いことがうかがえた。また、観察カードを用いて、継続的に野菜の成長の様子を記録した。野菜はすくすくと大きく育ち、子どもたちは収穫の日を待ちわびているようであった。

⑥野菜をよりよく成長させるために、地域の名人さんに相談し、対策する（3時間）

野菜が大きく育ってきたころ、子どもたちが、教師のところへ頻繁に相談にくるようになってきた。「先生、大変です。私の野菜、なんか元気がありません」「どうしよう、大きくなりすぎて、傾いてきました」本来野菜を順調に成長させるためには、支柱を立てたり間引きをしたり追肥をしたりしなければならない。事前に図書室の本で育て方については調べていたとはいえ、子どもたちはそこまで計算していなかったようである。実際に、茎や葉の重さに耐えられず、傾いたり倒れたりするものや成長が遅れているものが現れるようになってきた。子どもたちにとっての三つ目の困難である。

子どもたちに「どうする？ このまま元気がなくなってもいいの？」と投げかけると、「地域に野菜づくりにくわしい人がいるから聞いてみたい」という声があがった。そこで地域の方を訪れ、どうすれば野菜が順調に育つかを相談することにした。地域の方からは、支柱を立てること、間引きをすること、追肥をすることなど、具体的なアドバイス

をいただいた。中には、実際に学校の畑に来て、丁寧にアドバイスをくださった方もいた。子どもたちは地域の方の力を借りながら、直面した困難を乗り越えていくことができた。



写真8 地域の農家の方に相談する児童の様子

「カラスをやっつけよう」という意見である。自分たちが一生懸命育てた野菜が被害に遭っているのだから、子どもたちの素直な考えと言えよう。しかし、話し合いが進むにつれて、「カラスにも命があるのだからやっつけるのはかわいそう」「カラスだって生きるために必死なのだから仕方な



写真9 畑を荒らすカラス

⑦カラスから野菜を守るための方策を考える(1時間)

6月下旬に差しかかり、いよいよ収穫が間近になったころ、本単元での最大の事件が訪れた。それは、カラスによる被害である。畑の周辺にはカラスが多数生息しており、子どもたちが下校し、人がなくなった時間をねらって、野菜が食べられてしまうようになったのである。朝学校に来ると、畑の周りに、食べ散らされた野菜が毎日散乱するようになった。四つ目の困難である。早速授業で話し合いの場をもつことにした。

カラスが野菜を食い散らかす様子を運よく撮影できたので、その映像を子どもたちに視聴させ、どのようにこの問題を乗り切るかを考えさせた。映像を見た子どもたちからまず飛び出したのが



写真10 カラスによる被害



写真11 話し合い活動の様子



写真12 カラス対策について話し合いを行った際の板書

い」などの意見が出るようになった。最終的に、カラスに危害を加えることなく、野菜を守るという方針で意見が一致した。

⑧野菜をカラスから守るための材料や材料費をどうするか話し合う(1時間)

前の時間に、カラスから野菜を守るためにネットをかぶせる、キラキラしたものを置く、かかしを作るなどのアイデアが出された。子どもたちはやる気いっぱいである。しかし、ここであえて、教師から**五つ目の困難**を子どもたちに提示することにした。それは、「かかしやネットなどを作る材料や材料費はどうするのか?」ということである。

子どもたちは、必要な材料やお金は自由に入る、どこかで先生たちが用意してくれると思込んでいる。その思いにあえて「待った」をかけて、子どもたちにどうすれば必要な材料や費用を集めることができるかを考えさせることにした。もちろん金銭にかかわる問題は、いくら子どもたちだけで話し合っても答えは出てこない。そこで教師から、「一つだけ方法があるにはあるけど…」という形で、方法を提示することにした。それは、学校運営協議会で委員の方を説得して協力を得る、予算インセンティブという方法である。

本校は、コミュニティスクールの一環として、学校の運営や方針について話し合われる学校運営協議会が定期的開催されている。地域の方の前で今の状況を説明し、共感を得ることができれば、自分たちに必要な予算を獲得できるかもしれないと、子どもたちに説明した。子どもたちは当初は大勢の人の前で話すことのためにためらいを感じていたが、やがて「野菜を守るために勇気を出して頑張ろう」という方向で話が進み始めた。そして、ただ口頭で説明するだけでなく、一人一人自分のアイデアをプレゼンテーションして、よく分かりやすく伝えようというアイデアが子どもたちから出された。そこで、数日後にある学校運営協議会に向けて、急ピッチで準備が進められることになった。

⑨学校運営協議会でプレゼンテーションし、必要な支援をお願いする(3時間)

学校運営協議会に向けて、自分の考えるカラス対策についてプレゼンテーションを行うことになった。2年生という発達段階を考慮し、プレゼンテーションは手がきしたものをスクリーンに提示して説明させることにした。

学校運営協議会では、それぞれが自分の考えを説明し、必要な材料や予算をお願いした。たくさんの地域の方が見つめる中、緊張しながらも、一人一人が自分の考えを最後まで伝え切ることができた。協議の結果、ほとんどのお願いを受け入れてくださることになり、子どもたちはとても嬉しそうな表情を浮かべていた。こうして材料や予算を勝ち取ることに成功した子どもたちは、翌日より早速カラス対策に取り組むことになった。



写真13 プレゼンテーションの様子



写真14 ある児童のプレゼンテーション資料



写真15 結果を伝えられる児童の様子

⑩カラス対策を実行する（3時間）

かかし作り、防鳥ネットづくりなど、それぞれが自分の考えたアイデアに沿って活動を進めていった。実際にこれらの対策をしたことで、以後はカラスから被害を受けることがなくなり、野菜を順調に成長させることができた。



写真16 防鳥ネットを張る児童の様子



写真17 かかしを作る児童の様子

⑪収穫した野菜をどうするか話し合う（1時間）

野菜は次々と収穫でき、子どもたちは嬉しそうに学校で食べたり家にもって帰ったりしていた。そのうち、子どもたちから「野菜をいろいろな人

に分けてあげたい」というアイデアが出された。そこで、収穫した野菜を今後どうするか、話し合いの場をもつことにした。

まずこのまま自分たちで食べ続けるか、その一部を誰かに分けてあげるかを話し合ったところ、全員一致で後者が選ばれた。理由を聞いたところ、「野菜を作るときにいろいろな人にお世話になったので、恩返しをしたい」ということであった。そこで、どのような形で恩返しをするかを話し合ったところ、野菜の作り方を教えてくださった地域の方や必要な援助をしてくださった学校運営協議会の方に野菜をプレゼントする会をもつことになった。（当初は収穫した野菜を使って料理を振る舞うことが計画されたが、感染症対策として、その案は見送ることになった）

⑫八百屋さんを開き、地域の方に感謝の気持ちを伝える（3時間）※準備時間も含む

最終的に選ばれたアイデアが、八百屋さんを開くという方法である。八百屋といっても、実際に現金を集めるのではなく、おもちゃのお金を用意して、買い物をしてもらおうということになった。子どもたちは、収穫した野菜を丁寧に並べたり感謝の気持ちを綴ったレシートを用意したりと、終始主体的に活動を進めていた。当日は、多くの地域の方に来校していただき、野菜を渡しながら感謝の気持ちを述べる子どもたちの姿が見られた。

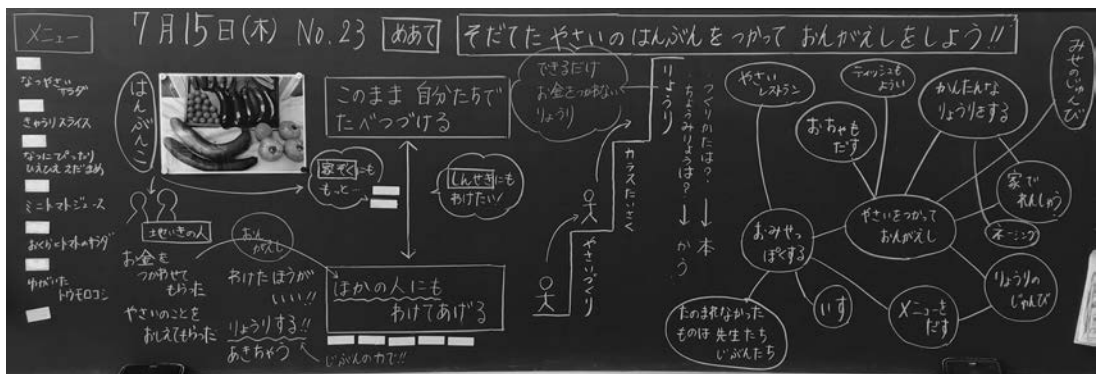


写真18 収穫した野菜をどうするか話し合った授業の板書



写真19 野菜を販売（プレゼント）する児童の様子①



写真20 野菜を販売（プレゼント）する児童の様子②



写真21 児童が作成したお礼の気持ちを込めたレシート

⑬活動を振り返り、なぜ野菜づくりを成功させることができたのかを話し合う（1時間）

すべての活動を終了した子どもたちに、なぜ野菜づくりを成功させることができたのかをじっくりと考えさせた。すると、「野菜が頑張って大きくなってくれたから」「地域のみなさんが助けてくれたから」という意見に加えて、「野菜の元気がなくなったときやカラスに食べられてしまったときでもあきらめずに、自分たちでなんとかしようと頑張ったから」「お金が必要になったときに、自分たちでプレゼンテーションして思いを伝えたから」という意見が多数出された。最後は、一人一人に振り返りを書かせて単元を終了した。（振り返りの内容については後述する）

4 | 成果と課題

(1)成果

成果としては、何より子どもたちに、困難に立ち向い、乗り越えようとする経験を積ませることができたことが挙げられる。実際に、活動を終えた子どもたちが書いた振り返りカードには、次のような記述が見られた。

- ・野さいをそだてるのは本当に大へんでした。とちゅうで野さいの元気がなくなったときはしんぱいだったけど、〇〇さんに教えてもらったとおりにすると元気になりました。カラスから守ることも大へんだったけど、あきらめずにがんばってよかったです。
- ・学校うんえいきょうぎ会で発表するときは、とてもきんちょうしました。発表するときやけっかを聞くときはなきそうでした。でもゆう気を出してがんばったので、野さいをカラスから守ることができました。自分でもすごいと思いました。

これらの記述からは、子どもたちが様々な困難を乗り越えたことへの達成感や自信をうかがうことができる。また、本単元終了後も、町探検やおもちゃづくりなど、様々な活動を行ったが、いわゆる指示待ちではなく、自らの意志で積極的に行動しようとする姿が見られた。特に町探検では、1回目の探検で道に迷ったりうまくインタビューできなかつたりという失敗が見られたが、どうすればうまくいくかを自分たちで話し合い、再挑戦しようとしていた。これらのことから、本研究でねらいとしていた「困難に立ち向い、乗り越えようとする力」がしっかりと育まれたことがうかがえた。

このほか、地域の方との積極的な交流を図ることができたこと、コミュニティスクールの特色を生かした単元を構成することができたことなども、大きな成果として挙げられる。本研究で目指した

「困難に立ち向い、乗り越えようとする力」以外にも、郷土愛、情報収集力、プレゼンテーション能力など、様々な資質・能力を育てることができたと考える。

い。子どもたちを伸ばしていくには、的確な評価基準がやはり必要である。そこで、単元終了後に、表1のようなルーブリックを作成し、次年度からの指導に生かすことにした。

(2)課題

課題としては、評価のことが挙げられる。研究テーマである「困難に立ち向い、乗り越えようとする力」が子どもたちに備わってきたことは先述したとおりであるが、一人一人の子どもたちがどのレベルからどのレベルまで上がったのかということは、やはり曖昧であったと言わざるを得な

5 | 終わりに

生活科で野菜を育てるという単元は、私自身、過去に何度も行ったことがあるが、その際はすべての段取りを教師が行い、子どもたちはただ野菜を植えて、水やりをして、収穫するというだけであった。確かに野菜は順調に育ち、収穫の喜

表1 単元終了後に新たに作成したルーブリックの一部

評価計画(ルーブリック)

	学習活動 評価方法	S (期待以上)	A (十分満足できる)	B (概ね満足できる)	C (努力を要する)
4	カラス対策について議論し、野菜を守る方法を考える。 《評価方法》 ・行動観察 ・生活カード	野菜やそれらをねらう別の生き物も命あるものであるという認識をもち、共生の必要性について友達に訴えている。また、その上で野菜を守る方法について、これまでの生活経験を踏まえながら、アイデアを5つ以上出している。	野菜やそれらをねらう別の生き物など、様々な生き物の立場に立ちながら、野菜を守る方法について、これまでの生活経験を踏まえながらアイデアを3つ以上出している。	野菜やそれらをねらう別の生き物など、様々な生き物の立場に立ちながら、野菜を守る方法についてアイデアを出している。	野菜やそれらをねらう別の生き物も、命あるものだという認識がない。また、野菜を守る方法を1つも考えられない。
5	学校運営協議会の場でプレゼンテーションを行い、必要な経費を交渉するとともに、得られた経費を使ってカラス対策を実行する。 《評価方法》 ・行動観察 ・生活カード	学校運営協議会の場で、必要な経費や材料について、分かりやすいプレゼンテーションを作成し、ICT機器を活用しながら、自分の言葉で説明している。また、委員の方からの質問にも臨機応変に対応し、自分の思いや願いを一生懸命伝えている。	学校運営協議会の場で、必要な経費や材料について、分かりやすいプレゼンテーションを作成し、ICT機器を活用しながら、自分の言葉で説明している。	学校運営協議会の場で、必要な経費や材料について、ICT機器を活用しながら、自分の言葉で説明している。	学校運営協議会の場で、必要な経費や材料について、説明をすることができない。
	野菜の収穫の喜びを味わうと	どのような形で地域の方に感謝の思	どのような形で地域の方に感謝の思	みんなで話し合ったアイデアを基	お世話になった方に感謝の気持ちを

びも味わわせることができていたが、今回の実践のときのような、大きな達成感・満足感を子どもたちが得ることはなかったように思う。教師は、つい子どもたちが直面しそうな困難を、可能な限り排除しようとしがちである。しかし、それらの困難は、様々な資質・能力を育てる上で絶好の機会であり、そこに大きなチャンスがあると考ええる。もちろん、すべて子ども任せで教師が何もしないという意味ではない。子どもたちが困難を自らの意志で乗り越えたいと思うような強い動機付けを行う、そして困難に出合った際は目線を合わせて一緒に対策を考える姿勢をもつ、子どもたちの考えだけではどうにもならない問題については必要に応じて助言を行うなど、教師の役割が改めて大きいと感じた。

今回は、生活科の一単元を中心に研究を進めたが、今後は別の単元、さらには他の学年の様々な教科・領域で積極的な単元開発を進めていきたい。そして、変化の激しい社会に立ち向い、自らの意志で乗り越えようとする子どもたちを今後も育てていきたい。

【主要参考文献】

- ・小林明子「学校教育を活かした子どものレジリエンスの育成－学校危機の予防と回復を支えるアプローチ－」教育心理学年報第60集 2021
- ・須本良夫『生活科で子どもは何を学ぶか』東洋館出版社 2018
- ・鹿毛雅治『授業という営み 子どもとともに「主体的に学ぶ場」を創る』教育出版 2019